

## 祭りの再誕生

# 中世宗教連続劇の理念と神の道化師達

石 井 美 樹 子

### I. 中世宗教連続劇の理念

#### —祭りの再誕生—

核戦争の可能性が我々をおびやかす、公害が実際に人間の生命をむしばみつつある今日、人類は生きながらえることは出来ないのではないかという不安が現実のものとなりつつあります。我々は、もはや、生命の更新を祝うことが出来なくなっております。原爆の耳をつんざく爆音の後の死体の山と焼けただれた都市は世の終りの縮図をみせつけ、無尽蔵に生命の糧をはぐくんでいるかに見えた 広大な海が死と化した今、「悔い改めよ！」というプラカードを掲げて海水客の間を黙々と歩く宣教師をだれが笑えるでありましょうか。我々は、科学と合理精神は、人間の完成にたいする究極の目的を持たないことを知ったのです。科学は人間の信仰の対象とはならない。人間の生命を託する価値を持たない。それなら、人間は、ただ破滅へ向かって不安と絶望の中を生きなければならないのでしょうか。

現代の虚無的精神状況は、信仰の滅亡が人間から確信を奪った時に始まったと言われております。つまり、

……現代のこの神不在的な風土は、私見によれば、歴史的なサクラメンタル、象徴的世界観の否定と崩壊から生み出されたものといえる。注<sup>1</sup>

中世宗教劇は、詩的、芸術的なイメージによって、宇宙の究極の真実を具象化した、1つのサクラメンタルであると言えます。世界のあらゆる現象、目的、道徳律を説明するある1つの総体を生きた体験の中でとらえようとし、人間を歴史に結びつけ、それを共同体の中で祝った祭典です。中世を完全に復活させることは出来ないし、また、その必要もありませんが、中世人の経験の中の、人間を虚無の淵からひきあげる豊かな生命力に触れることは必要であります。我々の中に、祭儀への深い希求が湧いてくるかも知れません。新たに発達させられた中世人の経験が、現代に、生命のよろこびを与えることも可能でありましょう。

### —中世と現代—

現代文学は、根源的な目的と意味を失った世界に生きる現代人の苦悩を主要なテーマにしてきました。ニーチェ以来、実存主義作家と不条理の劇場とは、こぞって、神なき世界に生きる現代人の精神状況を取り扱ってきました。しかし、キリスト教が全ての生活の基盤であり、飽和状態に達していた時にさえ、混沌の世界に生きることの恐怖はありました。

中世のキリスト教世界の生活は、その全ての面に於て、宗教的概念に滲透され、まさしく飽和状態に達していた。キリストと信仰に関係づけられない事象や行動は全然なかった。全ての試みがあらゆる事物の宗教的解釈を目的としていた。かくして熱烈な信仰の驚くべき展開がみられるのである。こうした飽和した雰囲気にも包まれてはいても、しかし必ずしも常に宗教的緊張、本当の超越性、現世よりの解脱があったわけではない。<sup>注2</sup>

そして、マーティン・エスリンの不条理の演劇についての視点は、中世と現代が本質として共有するものについて我々の目を向けさせてくれます。

世界を無意味なもの、統一原理をもたぬものとして提示するのは、人間の思考が宇宙の総体を1つの完全な統一された一貫したシステムに要約出来るという理念に出発する。そういう哲学の見地からのみ提示するのであるから。<sup>注3</sup>

「空虚と無意味性」の前には、宇宙には究極のリアリティが存在するのだという前提がなければならないと言っております。つまり人間の思考が

世界のあらゆる現象を説明する一貫した公理が存在するという可能性をどこかに許しているかぎり、統一原理を失った世界に生きる人間の苦悩は消えることがないということです。中世の宗教連続劇は、キリスト教が自明の理であった世界で愛好され、不条理の劇場は、神の不在の世界で、教会のかわりに、人々をひきよせています。世界は何故創られたのか。人間はそのなかでどのような位置を占め、いかなる役割をになっているのか。正しいことと正しくないこととは。2つの劇場は、共に、その様な、人間の実存にかかわる本質的命題に答えられない無意味で無目的な世界に生きることの耐え難さを知らせます。確信のない世界における人間の条件自体の不合理さ、バカバカしさを直視させ、究極の宇宙のリアリティと無関係に生きる生活の無意味さをきびしく批判するのです。不条理演劇も中世宗教劇も、人間の存在の真の姿を自覚させ、宇宙の全き価値体系に目を向けさせます。人間は、統一ある完全な宇宙という総体の前にあって、はじめて無力なものとしてとらえられるのです。

シェイクスピアの道化も、ブレヒトの道化も、そしてベケットの道化も、皆、中世の伝統の上にあります。不条理の演劇は、中世から、ゴシック文化から、その考察をはじめなければならないでしょう。中世に帰れ、中世を復活せよとの声は、遠い海鳴りのように、我々のまわりをつつみはじめたようです。

### —祭儀への希求—

宗教的体験は、宗教上の修業と瞑想とに専念することによって、神との霊的な交流を開き深い形而上世界に触れることによって得られます。しかし、週の6日を俗事にまみれてくらす民衆にとっては、霊的体験の世界は容易に近ずきがたい世界です。神、天地の創造、キリスト、死と復活、天国、最後の審判といったキリスト教の教義が人々のゆるがない信仰として信じられていた時代でも、霊的世界をリアリティと感ずることはむずかし

かったのです。ホイジンガーが述べているように、常に宗教的緊張、真の超越があったわけではなく、そのため、神の实在、教理の現実性を信仰させ、それを持続させる様々な工夫がなされました。まるで天国のような教会建築、音楽や絵画や美術。中世カソリックの聖職者は、芸術と祭式がわかつ1つの衝動、

希求する対象もしくは行為を表現すること、作ること、行うこと、増幅することによって、胸中に強く感じられている感動、又は願望を吐露し発表しようとする意欲が存在している。<sup>注4</sup>

を知っておりました。聖職者が、実人生と芸術とを結びつけるのに祭式を最大限に利用したことは、彼等が、人間の心理について深い洞察力を持っていたことを示しております。アウグスティヌスは演劇の持つおそろしい魔力について告白しています。

私は演劇に心をうばわれてしまった。そこには、私のみじめさを映しているいろいろな似姿と、私の愛欲の火を燃え立たせる薪とが、みち溢れていたからである。<sup>注5</sup>

中世の聖職者は演劇の持つ害悪を知っていたにもかかわらず、それを実人生と宗教的体験とのかけ橋としてとり入れたのです。芝居の持つ魔力によって、空想と追想の世界を实在と感ずることは容易になるのではないかと考えました。そして、中世の美についての考え方は、我々のそれよりもっと幅広い領域に属しております。それは、いつも、完全、釣合、光輝といった概念に帰します。トマス・アクイナスは次のように言っています。

……さて、美には3つのことが必要である。まず完璧、或は完全と言うべきものだ。何故なら、不完全なものはそのことだけで不快である。それから均齊のとれた釣合、あるいは調和といったもの。最後に明澄さである。<sup>注6</sup>

ここで美の完成された型が神と神の国であることはあきらかです。中世芸術の追究した対象は、このような意味においての美であります。芸術の第一の目的は、世界や人生の意味について答えることの出来る神へ目をむけさせることであります。

近代科学の持つ力の限界を知った20世紀末期をむかえて、我々は、再び文明の中から祭式を取り除いてきた近代の人間の歩みの誤ちを指摘する知識人の真摯な声をききはじめております。

宗教が衰退した後、現代文明に欠けていると深く感じられるのは、あらゆる人間の内的欲求に応ずる祭儀の領域を失ったことである。我々は少なくとも、科学的方法によるすじの通った哲学類似品をもっているが、それを生きた現実とする、人間の生活の体験される中心とする手段を持たない。<sup>注7</sup>

—マーティン・エスリン—

聖なるアメリカ」の神話が崩壊され、泥沼のベトナム戦争を続けるアメリカから、ハービー・コックスは、キリスト教の信仰をもつて、祭式の復活を叫んでいます。

今日、20世紀後半において、われわれは、愚者の饗宴によって代表される精神を必要としている。成功と金によって支配される社会において、われわれは、明らかに、非生産的な祭りの再誕生と、表向きな祝いを必要としている。風刺を隔離させ、政治を想像から分離させている時代に、われわれはもっと、社会的空想を必要としている。われわれは、われわれの時代のために、われわれ自身の文化的表現において、愚者の饗宴について正しいことと良きことの再発見を必要としている。われわれは、この精神のよみがえりを必要とし、それが起こっているきざしがあるのである。<sup>注8</sup>

現代ヨーロッパの不安と苦悩は生の究極的意味を与えていた伝統的キリスト教が、合理精神と科学精神に人間に対する支配力をゆずり渡してしまった時にはじまったと言われています。16世紀に始まった自然征服は時と共に完成し、ほんの最近まで、人々は、科学の知識には限界があることを気づきながらも、科学が宇宙の法則を全て解きあかしてくれるものと信じていました。不思議とおもわれるものは全てなくなるであろうと予想していました。月からの人類の第一声を聞いた時の世界の人々の昂奮と熱狂は、まだ我々の内に強く印象づけられています。しかし、あの「小さな第一歩」は、恐怖と疑惑の深淵への第一歩であったのです。科学思想によって、これまでの生活の全ての基盤を根こそぎにされてしまった19世紀人の不安と懐疑にみちた精神状況にはまだそれを支えるものがありました。科

学の能力に、まだ、絶対の信頼をおいていたからです。我々と同時代に生きる人の苦悩と不安はもっと強烈なものです。第二次世界大戦とベトナム戦争で使われた数多くの科学新兵器、汚染された死の海、生命をむしばみ奇形を生む新薬の数々。頑強に傲慢に科学の優位性を主張しつつけた科学が研究の果てに人間に与えたものはこのようなものであったのです。征服された自然は人間に復讐を加えつつあります。科学は、自分の能力の限界を自覚しはじめました。人間の生についても、宇宙の最高の原理についても、いかなる決定論も与えられないことを悟りはじめています。ブリュックベルジュは、「キリスト伝」の中で、1960年ノーベル文学賞を受けたサン・ジョン・ペルスのストックホルムでの現代科学に対する詩の位置をのべた受賞記念講演を引用して、現代科学のとるべき道を指し示しております。

科学者のために、「理性のたすけ」として直感や芸術的ヴィジョンを求めるのは、「祈り」とか「めぐみ」とかの言葉が、ふたたびある意味を——それも必ずしも宗教的でない意味を、とり戻すような道に入った、ということである。もちろん、科学的手段で神の存在が証明されるなど、期待できるものではない。しかし、クロード・ベルナールの言う「自由な思考」が、確たる真実から真実へと進むのではなく、疑問から疑問へと進むことによって、自分自身にはあくまでも忠実でありながら、原初の闇の戸口に托鉢僧のごとくうやうやしくひざまずくこともあり得るのだ。少なくとも、これは単なる幻想ではない。そのとき科学者は、しっかりと体を起こして暗がりを進むべき自分のつとめを捨てることなく、時を得ていこいと瞑想にひたりながら、名前は知らぬとしても、とにかく光の源であるこのより高い救いの手を、別に恥じとも思わずに求めることができるであろう。<sup>注9</sup>

このブリュックベルジュの言葉は、神も、そして科学さえも信仰の対象として奪われてしまった現代人に、生きのびるための唯一の手段を教えております。ブリュックベルジュは、生半可な科学の知識は、人間を神から遠ざけるとも、深く知れば、また、神のもとにつれ戻されるのだとも言っているではありません。科学を捨て神に帰れと説いているのでもありません。疑問から疑問、不安から不安へと進むとき、宇宙の神秘の前にひざま

ずくこともあり得る，人間として与えられたつとめを果たし，しっかりと歩いていけば，その時，輝かしい光が暗闇をてらしてくれるであろうと言っております。

現代の「神不在」的状况が中世的世界観の崩壊から始まったとは言え，我々は，もはや，中世に戻ることは出来ません。しかし，虚無の淵から光の源へ向かって歩くことのよろこびを知った者達の祭典の中に，詩的，芸術的ビジョンを求め，生命の神秘を祝う虚心の心を見出すことが出来，希望をもつことのよろこびを与えられるであります。

### —祭儀の文化的価値—

中世の喜劇は，まさに，“権力ある者を王座から引きおろし，卑しいものを引き上げる”（ルカによる福音書・1：25）ことからはじまりました。

クリスマスシーズンに行なわれる祭りの1つに「<sup>おきなご</sup>幼児のまつり」*The Feast of the Innocents*，というのがありました。ヘロデ王が，いたいけない無垢の幼児を虐殺したことを心に刻みつける日でありました。この日は，聖母マリアが，主のはした女，エリザベスを訪門したように，少年聖歌隊の中から子供のビショップを1人選び，高僧の間に座ることを許し，この日ばかりは，宗教的儀式や勤行について高僧に命令する権力を与えたのです。<sup>注10</sup> 若者が年長者を支配する，この既成の価値の転倒は，キリスト生誕の最も神聖で最も深い宗教的意味であります。しかし，イノセントという言葉には，無邪気，無知，間抜けといった意味もありますから，「幼児のまつり」が，民衆の空想とエネルギーにはぐくまれた時，「愚者の饗宴」，*The Feast of Fools*，となって中世の世界を華やかに濶歩するようになります。

中世のヨーロッパには，到るところに愚者の饗宴として知られる祭日があった。その祭りは普通1月1日頃に祝われ，非常にはなやかな時であり，敬虔な祭司やまじめな町の人々までもが卑猥な仮面をつけ，みだらな歌を歌い，一般に，

全世界を、どんちゃん騒ぎと風刺でもって眠らせなかった。下級の坊主どもが顔を化粧でおおい、上級僧侶の僧衣を着て気どって歩き、教会と裁判所の荘厳な儀式を嘲った。時には、失敗した主君や、嘲られた王や、子供っぽい大司教が、この祭りを司どるために選ばれた。ある所では、子供っぽい大司教がミサ遊びをとり行った。愚者の饗宴の間、普通の習慣や習わしは、嘲りをのがれることはできず、領地内の最高の貴人でさえも、皮肉でもって槍玉にあげられるのであった。<sup>注11</sup>

「幼児のまつり」が「愚者の饗宴」となっても、この2つの祭典が福音と終末の希望の論理を根底にもっていることには変わりありません。中世宗教連続劇は、「愚者の饗宴」とは別のものでありますが、愚者の饗宴のもつキリスト教の根本の批判の精神と祭りを祭りとして楽しむ庶民のエネルギーとを持っております。民衆の手にゆだねられた後にも、最後まで聖職者の指導のもとにありましたから、比較的完全な形で長い間生命を保つことが出来ました。コックスは、愚者の饗宴の文化的価値を、社会批判の精神と仕事から解放されてのよろこびのひとときを持ったこととの2つをあげておりますが、中世宗教連続劇の文化的価値は、饗宴を最後まで祭儀として祝ったということにあると言えましょう。単なるどんちゃん騒ぎや風刺のみで終ることはなかった。現世に生きる人間に、神の形而上の深遠なる世界への秘密の鍵をいつでもさしのべていたのです。劇中の喜劇的シーンと人物達は、このような視点から考えられなければなりません。このような土台があったからこそ、宗教劇の作家は、聖書の中の聖なる人物を愚者の群れの中につきおとすことも出来たし、救い難い愚かな人間を聖者の間へ引き上げることも出来たのです。

賃金が安すぎる、食物が悪い、酷使すると牧童にごねられて、大喧嘩をはじめ「牧歌劇Ⅱ」の三人の羊飼。おてんばで、おしゃべりな妻に愚弄されるノアの茶番劇。愚痴ばかりこぼす気の毒な亭主、ヨセフ。神経症に悩むトマス。V. A. コルブは、劇のテキストには、細部においても、その精神においても、聖人を侮ったり冒瀆したり、弄んだりする傾向があったということを示すものはなにもないと言っております<sup>注12</sup>が、聖書にさえ、



卑猥な誇張や皮肉はあるのです。神の箱を携えて凱旋するダビテを迎える人々は、主の前で、手鼓と鈴とシンバルでもって歌い踊りましたし、年老いたアブラハムの妻サラが子を産むのは、はずかしくお笑い草であったから、イサク（笑い）と名づけたのです。しかし、イサクの笑いが、よろこびと希望の象徴であるように、中世劇の愚かな人物達は、最後には、さしのべられた神の愛の前にひざまずき、希望の光を与えられます。笑うことは、希望への道につながることを知っていた中世人の喜劇の感覚は何と豊かなものでありましょうか。

### —中世連続劇の理念—

#### 併置のドラマ

ギリシア人は、悲劇によってよびおこされる感情を憐憫と恐怖と考えました。憐憫は不当な不幸に陥った人に対して起こるものであり、恐怖とは、われわれと同じような人がそのような目に会うのをみて起こるものがあります。憐憫と恐怖をひきおこす悲劇の筋は、故に、善い人間が幸福から不幸へと移ってゆくようなものであってはならず、悪い人間が不幸から幸福へと移ってゆくものであってはならない。また、極端に悪い人間が幸福から不幸に陥ってゆくような筋もさけなければならないと考えております。悲劇の主人公の運命の変転は、主人公の心の邪悪さではなく、彼自身のある大きな過ちに見出さなければなりません。ギリシア悲劇の主人公達は、冷酷な運命に反抗し、最後にはそれを受け入れる。オイディプスはアポロンの託宣に、はじめから運命づけられている。しかし、彼は、それに堂々と男らしく立ちむかい、戦い、そして、ついに屈服させられる。彼は勇敢で男らしいために、悲劇の主人公たり得る。

ギリシア人にとって喜劇とは、

喜劇に関して言えば、それはすでに述べたように、普通よりも悪い人達を模倣したものである。ただし、悪いとはいっても、どのような欠陥についてでも言う

のではなく、ある特定の種類、つまり滑稽さ——それは醜さの一種であるが——についてだけのことである。滑稽さとは、他人は苦痛も害も与えることのないある過失または醜悪さだと言えよう。たとえば笑いを誘う喜劇の仮面は醜く、ゆがんだものであるけれども苦痛をもたらすことはない。<sup>注13</sup>

中世宗教連続劇を考える時、上記のような古典劇の理念が参考になるとはおもわれません。中世劇は、いかなる意味でも、ギリシア人の考えた悲劇と喜劇のジャンルに分類することは出来ないでしょう。

ユダヤ文学は、ギリシア人の憐憫と恐怖に、もう一つ希望をつけ加えました。運命に対して、自己の行動を選びとれるのだという道が開かれました。希望によって、死に運命づけられた悲劇的で不合理な人間の生は、喜劇の可能性を含むものになります。このため、中世宗教連続劇は、悲劇と喜劇との併置のドラマであるといえましょう。

イエスは、滑稽であるけれども、醜悪であるどころか、限りなく美しく、その人生のプロセスは、善い人間が幸福から不幸へ移ってゆくプロットを持ち、不幸の極限において、逆転がおこなわれ、勝利をなしとげる。イエスは、堂々と男らしく運命に立ちむかいをしない。「神よ、なぜ私を見捨てられるのか」と叫びながら、血のような汗でゴルゴダの丘をぬらす。紫の上着をきて、いばらの冠をつけ、民衆の間をひきずりまわされる姿は、弱々しく、いたいたしい。イエスのドラマのクライマックスの時、十字架のキリストを見て、人々は泣き、身をきよめられたでありましょうか。いいえ、人々は、嘲り、笑ったのです。けれども、あまりに弱々しく、限りなく美しくあったために、その姿は、嘲笑する人の心に恐怖と憐憫をしのびこませる。復活の勝利によって、笑った者達は、福音の美しい調べを聞いたのです。

中世宗教連続劇は、古典劇のあらゆる法則に従ってはいないのです。それ自身の演劇の理念を探らなければなりません。それは、偉大な主人公イエスを直視し、中世人の歴史観、時の観念について理解することから得られるでありましょう。

彼は主の前に若木のように、道化キリスト  
 かわいた土から出る根のように育った。  
 彼にはわれわれの見るべき姿がなく威厳もなく、  
 われわれの慕うべき美しさもない。（イザヤ書 53：2）

道化としてのキリストの象徴は、イザヤ書をはじめ、聖書の至るところにみられます。切迫した神の国を説いていたキリスト教の最初の時代においては、道化キリストの象徴は正しかった。いばらの冠が王冠にとってかわり、紫の衣がまばゆい法衣にかわった時、キリスト教は喜劇の精神を失ってしまったのです。今日、再び、道化としてのキリストに触れようとする神学者があらわれているのは興味深いことです。

道化師のように、キリストは習慣を無視し、王冠をかむった頭を軽蔑した。放浪する吟遊詩人のように、彼は自分の頭をおちつける場を持っていない。サーカスの行進の道化のように、キリストは自分が地上の権力を持たない時に、王の行列で満ちた町にはいって行って、既存の権威を皮肉った。旅芸人のように、彼はよく食事やパーティに顔を出した。最後に、彼は敵によって、王の衣裳をつけた嘲りのおどけた姿に装われた。彼のおかしな要求を風刺する彼の頭上の徴をくすくす笑い、嘲弄する者の中で、彼は十字架につけられた。<sup>注14</sup>

道化としてのキリストの象徴は深い歴史の根をもち、文学的な古い土壤にあるものです。中世宗教連続劇においては、キリストは様々な装いであらわれてきます。教師、裁判官、癒し人、旅人、羊飼等。

チェスターの「羊飼の礼拝」の羊飼達も、タウネリーの「羊飼Ⅰ」に登場する羊飼達も、羊の病気を治す術を大変誇りにしています。

my tytefull tuppes are in my thought,  
 them to save and heale.

私は小さな羊達のことを心配しています。  
 羊達を救い癒そうと。

from the shrewd scab it (?) sought,  
 or the rot, if it were wrought,  
 yf the cough had them caught,  
 of it I colde them heale.

(*Chester plays, Adoration of the Shepherds*, 11. 11-16)

I shall heale them on a thraw  
cleane of there hurte.

heare is tarr in a pot,  
for to heale them of the rot; (11. 31-34)

羊が悪い病気にかかったら、  
肝臓病に苦しめられたら  
もし、風邪をひき、せきが出たら、  
それ等を私は癒すことができます。

よこしまな心の癌をすぐになおし、  
心をきれいにします。

ツボの中にタールがあります。  
羊達の病を癒すための。

キリストは、民衆に向って、劇中、自分は羊飼であると何度も述べています。

Brethren, I am filius Dei, the light of this world;  
he that followeth me, walketh not in darknes,  
but hath the light of lyfe—the scriptures so record——  
as patriarchs and prophetts of me bereth witnes,

.....

for I am the good sheapheard, that putteh his lyfe in Ioperdy  
to save his flocke which I love so tenderly, . . .

(*Chester Plays, Christ, the Adulteress Chelidonium*, ll 1—19)

兄弟よ、私は神の子であり、この世の光である  
私に従う者は、暗闇を歩むことなく、  
光の中を歩むであろう—聖書が記しているごとく—  
ヤコブの子と予言者が証言しているとおり……  
私は主の牧者であるから……

ここに、羊飼＝癒し人＝キリストというアナロジーが成り立つのですが、  
2つの劇に登場する羊飼は、キリストとはほど遠い、ひと癖もふた癖もある悪漢ぞろいなのです。タウネリーの羊飼は、不平たらたらの不満の徒。  
身にしみる寒さも、手のただれも、皆、神様のせいだとなじり、忍耐力の  
ひとかけらもない、おしゃべりな人達です。キリストの誕生を告げる天使

のメッセージについて物知り顔にあれこれ議論をし、謙虚な信仰心など少しももち合わせておりません。また、チェスターの羊飼達は、美しい天使の声をいっしょうけん命真似し、声をはりあげて競い合うのですが、もともと音楽的センスの皆無な彼等の音楽会は全く聞くに耐えない惨憺たる結果に終わります。

牧童トルールと羊飼との喧嘩のエピソードはシンボリカルな意味を持っています。賃金が安すぎる、衣服が汚い、食べ物がまずいといったは、ことごとく雇主である羊飼いに反抗するトルールは、若い世代の旗手とでもいうべき存在。新しい価値観をふりかざし、羊飼をこきおろします。

That will I never flee,  
though it were with you all three,  
to lay my liberay  
that wager will I hould.

Nowe comes Trowle the trew,  
a turne to take have I tight  
with my maistores, or I rew,  
put hym forth that is most of might!

(*Chester Plays, Adoration of the Shepherds*, ll. 241-248)

おれは絶対逃げない、  
たとえ、あいつらといっしょでも  
部屋を飾るのに  
お金がいるのだ。

さあ、トルールさん、  
主人にしかえしをしてやろう、  
それとも、いたい目にあわせようか、  
力のある者をやっつけるのだ。

つかみあいの大喧嘩がはじまります。年とった羊飼が三人組みになっても若い牧童にはかなわず、降参し、牧童の要求を全部きき入れる羽目になってしまいます。うす汚れた乱暴者の牧童とキリストとのアナロジーは、全く奇想天外な空想であります。このドタバタ喜劇の底には、「権力ある

者を王座から引きおろし、卑しいものを引き上げ」というキリスト生誕の福音のテーマが、しっかりと組み込まれてあります。盗人マックと羊飼との展開する家宅搜索のシーンは、キリストの生誕をグロテスクな程低次元の世界で祝おうとするものです。

Tercius Pastor. Mak. with youre leyfe, let me gyf youre barne

Bot vj pence.

Mak. Nay, do way: he slepys.

Tercius Pastor. Methynk he wepys.

Mak. when he wakyns he wepyo.

Ipray you go hence

Tercius Pastor. Gyf me lefe hym to kys, and lyft up  
the clowtt.

What the dewille is this? he has a long snowte.

(*English Miracle Plays Moralities and Interludes*, "Secunde  
Pastorum," ll. 589-596)

羊飼Ⅲ；マック、たのむからおまえの子供をくれ。ほら、6 ペンスだ。

マック；いや、だめだ、寝ているから、

羊飼Ⅲ；ふとんの間からのぞいているようだ。

マック；目をさますと泣き出すからあっちへ行ってくれ。

羊飼Ⅲ，キスをさせてくれ。ふとんをひっぱりあげるんだ。なんだいこの餓鬼は、長い鼻をしていやがる。

(ll. 589~596)

盗人マックに盗まれた羊が、ゆりかごの中に隠されています。マックの女房が生れたばかりの赤ん坊に見たて、あやしたり赤ん坊の泣き声を真似たりの大奮闘。ゆりかごの中の長い鼻の幼児をさがし出しにゆく羊飼のこの喜劇は、ベツレヘムに神の子イエスを礼拝に行く厳粛なシーンと併置されています。これこそ、コックスの言う「われわれのまわりにある希望のなさを笑うことによってのみ、われわれは希望の縁に触れることが出来る」体験なのです。

間抜けな羊飼，わるがしこい牧童，悪魔の子のようなマックの幼児。これらは皆，キリストのアナロジーです。そして，彼らが，単なるアナロジ

一にとどまることなく、深い形而上の世界を指向しているために、道化キリストの象徴であるのです。キリストは、何の権力ももたず無力で（羊飼）、みすぼらしく（牧童）、汚れたゆりかごに（マックの幼児）に横たわっておられる。その姿には威厳もなく、慕うべき美しさもない。しかし、中世人は、間抜けが誰なのか、何のために道化が王になられたのかを知っていたのです。キリストの生誕を祝う素朴な民衆の悪ふざけと、どんちゃん騒ぎには、霊的世界のリアリティがみちみちています。祭りの精神と空想によって受肉された道化師達は、過去を楽しげに語り、既成の価値を転倒し、笑い、そして、闇の中から光の源へ向かって無心に心を開くのです。喜劇と悲劇、厳粛さとおかしさとの併置は、宗教的世界の実在感を人々の心にしっかりと印象づけるものでありました。キリストに対する人間の関わり、生活と信仰との関わりを笑いの中で教えるものです。

#### 時について

中世宗教連続劇は、天地創造から最後の審判までの膨大なキリスト教の歴史を扱ったものでありました。出来事は、過去、現在、未来と進行してゆくのですが、それらは、論理的因果関係によって結ばれてはおらず、舞台上の全てのアクションは、象徴を含んでおりましたから、過去と現在が未来を決定するという近代人の奥深くに根ざしている歴史観では全く理解することは出来ません。未来は象徴の中に、不確かなものとしてではなく、すでに決定されたものとして存在しています。過去から未来への歴史の大スペクトルを見ながら、人々は、未来が過去と現在を決定しているということを知るでしょう。

近代の科学思想は精神を全くおきざりにしてきましたから、精神と物質を共にその論理体系の中に引き入れて宇宙を考察するアリストテレスの科学思想と近代のそれとは真向うから対立します。近代科学の決定論は、物理学や化学のような下部の理論からはじまって、次第に上部に達し、原子

や電子に基づいて宇宙の構造を説明しようとしします。アリストテレスは、反対に、宇宙の永遠不滅の最高の天体の運行から出発して、地上のあらゆるものの運動を支配する根本原理を発見しようとしします。天体の運行を支配し、自然の全体系を動かすのは、英知者である抽象的実在者の神であると考えました。クリストファ・ドウソンは、中世のキリスト教と文化を研究する者は、教父時代の思想と中世の思想とを混同してはならないことを警告しています。中世後期は決して「暗黒時代」ではないどころか、中世後期の文化は、ギリシア科学を再発見し、ギリシア思想の主要な伝統を元にもどした最も驚異的な功績をもち、中世科学のルネッサンス時代であると言っております。11世紀から15世紀初頭まで隆盛をきわめた中世宗教連続劇は、当然、「中世科学のルネッサンス」を無視することは出来ません。それでは、西地中海の異った文化がキリスト教世界に移植されたらどうなるのでしょうか。

さて、中世精神と現代精神とを比較してみても、どちらが一層ギリシア精神に近いかと尋ねるならば、もちろん、中世精神の方がギリシアに近い。それは当然の話であるが、しかし、もし、われわれが古代精神と近代精神とをはっきり2つに分け、中世が、そのどちらにつくかと尋ねるならば、中世世界は明らかに近代世界に結びつくであろう。なぜならば、中世人にとって、精神と物質とはもはや、ギリシア人におけるように、1つの不可分な統一体ではなくなっているからである。言いかえると、中世において、神は、宇宙という発電機において、磁石の役を果すような抽象的な叡智者とは考えられず、まさに「天主」すなわち「人類の創り主」にして「救い主」と考えられたからである。それと同時に、宇宙の運行も、もはや永劫の回帰などではなく、まさに初めあり、終りある霊の一大ドラマと解釈され、また世界は、遊星の力に盲目的に左右される運命と必然性の奴隷ではなく、霊の問題を解決すべき一大戦場と見なされるようになったのである。<sup>注15</sup>

中世のキリスト教劇の“時”についての観念は、ドウソンの述べている中世の科学精神と一致します。世界は、創り主によって創造された初めと終りのある一大ドラマ。ドラマにおいては、作家がドラマの時間と空間を手の中に握っている。結末は、初めから作家の心の中で定められている。不動の高みから全体をみまわし、劇全体のプロットを終局の目的へみちびく



べく支配する。そこには、余分なものは何もなく、秩序を乱すハプニングなど決しておこりはしない。見事に秩序だてられ、調和され、進行してゆく。

原爆の洗礼を受けた我々の時代は、人間は限りなく進歩することが出来るという傲慢で幻想的な白日夢からさめはじめております。時が未来へ向って無限に進展するという確信は根底からゆすぶられ、過去と現在が未来の原因だとする習慣的想定が説得力を持たなくなってきました。

キリスト教は、科学の前にひざまずけという声を見捨て、啓示の優位を説き続けてきました。イエスは、使徒達に、切迫した神の国を語り、未来が現在に対して大きな力をもっていることを強調しました。人々は、世の終りがくることを説いたイエスを嘲笑し、<sup>はりつけ</sup>磔にしたのです。未来の光の中で諸々の出来事を考えようとしない人々にとって、イエスの使信は、まさに、狂気の沙汰であります。現代人も神を信じない。しかし、科学の無限の発達を信じ、合理精神を重んじて来て近代社会のたどりついたところは、幸福な人間社会の完成からは、ほど遠いものです。人間の手からうみ出された科学兵器が、ある日突然、宇宙を「原初の闇」に戻してしまうかも知れないという強い確信。我々は、もはや、イエスの希望の論理、終末の論理を笑えないのです。中世宗教連続劇の理解は、過去と現在が未来を決定するのだという科学万能主義、機械的宇宙観を捨てた時に開けてくるでありましょう。現代ドイツ神学界の新しい潮流を代表する W. パネンベルグの創造と終末についての理解が、この中世の古い演劇の“時”について考える時、大いに参考になります。

統一性と力が互いに付随していることを認識するならば、われわれは、さらに、力という観念が意味を持ってくるのはただ未来との関係においてのみであることに気付くようになる。未来を持つ者のみが、力を所有しているのである。神の国の観念は、1つ1つの存在者の統一性と、未来から流れくる世界全体の統一性とのヴィジョンを惹起する。時間の帯の一方の端であるところの創造と、他方の端であるところの終末、この両者は、相共に現実を形成する同伴者である。し

たがって、未来は、万物が真に何であったかそして何であるかを開示することによって、万物の特定の意味や本質を決定する。現在においては1つの存在者は依然として「何ものか」であって、それ自体1つの統一体であり得るのは、ただ、それを統一する未来の予見によってのみなのである。未来が現在と過去を解釈する。あらゆる他の解釈は、それが未来を予見している程度に応じたのみ、助けとなるだけなのである。<sup>注16</sup>

中世宗教連続劇は、現在の中に未来を象徴によってあらわしてゆきます。それでは、中世人にとって、現在と過去はどのような意味を持っていたのでしょうか。

トマス・アクイナスは、ギリシア諸教父の教えによって、聖アウグスティヌスの聖寵論に改良を加え、東洋と西洋との2つの偉大な神学的伝統を統合しました。トマスは、大体において、アウグスティヌスの教えを受け継いだのですが、超自然的秩序の本体論的性格については、教父よりいっそう強調を加えました。聖寵とは、簡単にいえば、内的生命による更新の霊のことです。アウグスティヌスにとって、過去は、本来の意味での過去ではない。というのは、過去が真実のものとして語られる時、記憶の中から取り出されるものは、「過ぎ去ったものそのものではなく、過ぎ去りながら、感覚を通して、精神のなかに、いわば、痕跡をとどめたものの心象から把握された言葉である。」<sup>注17</sup> 故に、アウグスティヌスにとっては、過去は記憶である現在なのです。そして、現在、どんな小さな持続のひろがりも持たない程迅速に未来から過去に飛び移るものであるから、なんの広がりも持たない。<sup>注18</sup> しかし、現在における何らかのしるしをみて未来を予言し、未来を現在するものとして直視する。<sup>注19</sup> 人間の知性そのものが未来を直視出来るのではなく、精神をてらし、霊の全てを変える光明によって与えられる。中世劇に 天使が重要なキャラクターとして、しばしば登場するのは、人間と未来とのかかわり合いがこのようなものであるためなのです。キリスト教徒は直観によって(舞台上の人物は天使によって)、救いは神の約束を忍耐して待ち望むことによって与えられるのだというこ

とを知らされ、未来へ目を転じることを教えられます。未来の現在には期待となって、人々の日常生活のはるかかなたに指し示されます。現在という生の限界を、待ち望む神の国への準備期間として生きなければならない、未来のために与えられためぐみの時を大切にしなければならないと中世の説教は説いています。

And þer-fore arise, for nowe is tyme for to amend, for now is þe day sterre vpe . . . I vndirstond by þe day sterre no þinge else but þis tyme, þat is now tyme of grace.

For had oon man doon all þe synnes bat all þe world myght do, and he wold repente hym and amend hym, he shuld haue grace. But aftur þis tyme, when þi bodie is ded, had a man as mucche repentaunce as all þe world myght haue, but he amend hym or þat he die, els he shall neuer haue grace with-owten ende. 注20

さあ起きなさい、今は悔い改めの時、与えられた機会を有効に用いる日なのです……その日は、今のこのめぐみの時をおいて他にないのです。この世で罪を犯した全ての人々が、罪を悔い、改めれば、神のめぐみを与えられるのです。しかし、この時の後、肉体が亡ぶ時には、人は、この世での最も苦しい後悔に苦しまなければならないのです。死をむかえる前に悔い改めなければ、永遠に神の慈愛を与えられることはないでしょう。

過去は記憶である現在、未来の現在には期待。中世人は、聖書の世界を、自分達と同じ時代の風俗と風習によって視覚化しましたが、極端なまでのアナクロニズムとユダヤ文学の英国化の傾向は、彼等の時についての考え方を知れば当然のことと考えられましょう。一部の批評家はアナクロニズムに困惑し、非難の矢を向けておりますが。過去と未来を現在として舞台にのせたことは、時間のかなたに永遠の生活の視点を求めたためです。

V. A. コルブが言うように、従って、中世宗教連続劇には時の区切りがありません。ウィリアム・キャクストンの簡潔な言葉は、当時の人々の一般的考え方を伝えてくれています。「永遠に対して向い合え。全ての歴史的時は、ほんのつかの間のことにすぎない」注21

中世キリスト教連続劇は、カルバリの丘での人間イエスの苦しみを強調

し、イエスの十字架の受難をそのクライマックスにおきます。イエスを演ずる役者の体が傷つく程の迫真性をもって十字架のイエスをリアルに再現しました。グロテスクな錯綜や拷問場面のリアルさなどは劣悪な中世人のメンタリティーの為せる術というより、神の子イエスも、また、平凡な人間と同様、光のように飛び移る時の中で生を与えられたのだということを知らせるためでした。イエスは、決して、神のように時の外にいるのではない。イエスも、また、何の広がりも持たない有限な時の区切りの中で生きた。劇のリアルな効果は、常に、イエスという有限な実存を超越し、神支配の究極的未来を指し示すことを目的としていました。ここにも、未来の到来として神の国を考えるパネンベルグの現代神学が適合する不変の視点があります。

イエスは自己のかなたを指示した。それゆえ、彼において現象したものについての解釈は、イエスという現象を越えて、その使信が関わっている神へと向かわなければならないのである。この理由のゆえに、この人間における神現象の出来事の中に神と人間の何らかの混合を見ることは誤りである。しかもまさに、イエスが自己を離れて神の未来を指示しているゆえに、この未来そのものが彼においてまた彼を通して現在的になったのである。<sup>注22</sup>

舞台上では、歴史に従って過去から未来へと出来事が水平に進み、一方、論理的因果関係によらないエピソードは垂直に積重ねられてゆく。しかし、目的がはじめから設定されているが故に、下から上への求心的流れは、実は、神という不動の一点から流れ出た様々な支流であるのです。それらは、形而上的意味において、遠心的構造をもっておりま。中世人が、初めと終りのある霊のドラマを連続、Cycles、という構造に創り上げたのは、時についての観念が演劇の理念と深い関係にあることを示しております。水平的時の進行から見れば、イエスの生涯はみじめで、グロテスクで滑稽でさえある。イエスが指し示した、時の外では、イエスは現在を改革し永遠への大いなる力を持つ。神は実在としてではなく、到来しつつある未来として、イエスの中に存在している。イエスにより、人々は、生

きとし生けるもの全てがあらゆる生命の起源と関係づけられていることを知る。有限なるものへの必死にしがみついている劇のキャラクター達のアクションは、イエスと天使とそして神という歴史の根底の主要キャラクターとの併置によって考えられなければなりません。

三一論は、その未来がすでに到来しており、過去の世界と現在の世界を統合し、それを受容して永遠に自己の生のあずからせるところの愛の神として、到来しつつある神を記述している。<sup>注23</sup>

「『今』はめぐみの時」。「今」は永遠を指し示し、永遠の鍵をにぎっている。人間の様々な行為が舞台上でくりひろげられている間、混乱に近いエピソードの積み重ねの中に、たしかに、人類の歴史に最も意味のある、彼らの外にある時をとらえることが出来ました。悲惨な生活を強いられていた一般大衆は、シークエンスにリアリティを感じるによって、未来の中にある神の国の到来を待ち望む希望を与えられました。このことは、中世の宗教劇という祭儀の持つ最大の文化的精神的遺産であります。

### 併置の構造

キリスト教宗教連続劇の構造については、一般的に次のようなことが言われています。天地創造から最後の審判までのエピソードに次ぐエピソードの混乱に近い積重ねで、一貫した推進力に欠く。<sup>注14</sup> 保守主義が支配的。タイプ化した筋と人物。大げさな言葉とアクション。<sup>注25</sup> ギリシア演劇やエリザベス朝演劇等の様式化された演劇から見れば、たしかに、プロットにおいても性格描写においても、緊張を欠き、調和なく、一貫性にとぼしいでしょう。リアリズム演劇から見れば、演劇に必然の实在感を欠いております。しかし、この中世の演劇に、ギリシア演劇や近代演劇の理念を全面的にあてはめてはなりません。私は先に、中世の劇場は、実に様々な形態を持っていたことを述べました。<sup>注26</sup> 簡単なワゴンもあれば、ギリシアのような常設の円形劇場もありましたし、路上が劇場に早変わりしたりしまし

た。共通していることは、多次元にわたるアクションを可能にした構造であったということです。劇のアクションはあるエピソードが次のエピソードを導くといった関係にはなく、それぞれが独立した劇なのですが、根底のテーマを共有しているために、互に密接な関係にあります。筋の展開を追ってゆこうとすると混乱してしまうでしょう。2つの劇に同じキャラクターが登場しても、人物の発展とか、心理的動機を見出そうとすると、我々の骨折りは全く無駄になってしまいます。つまり、中世宗教連続劇は、ひとつの筋を持ち、出来事の結合をもつ劇ではないのです。劇の目的は、アクションのもつ象徴的意味によるテーマの達成にあります。そのため、沢山のアクションが併置されています。それらは、初めと中と終りを持って、ある全きものとして完成してゆく行為を模倣するのではなく、人類の救済というテーマを背負って集積され、象徴によって統一されます。

それは、演者という呪術師による一種の模倣呪術ではありません。<sup>注27</sup> トマスもヨセフもマリアもいかなる意味においても呪術者としての資格を欠いています。「私は王である」と主張し続けるイエスは、弱々しく、いばらの冠をかぶっている。それでいて、自明とおもわれているもの、伝統の中に明白に含まれているものに対して疑問を投げかける。愚かで愚劣なキャラクターを大笑いした人々は、その救いのなさに、反対に光の源へ手をさしのべる願望を深く感じるのです。現在あるおろかな人間の姿を無にしないため希望の光の中で考えることを知ります。

併置は、象徴と状況の軌轢を、新しい経験と前例のない知覚に対する機会として祝う。それは、ラディカル神学者の現在の経験の賛美を、記憶の名においてではなく、空想の名において否定する。それは、ラディカル神学と共に過去へのノスタルジアを捨て、希望の神学と共に新しさへのノスタルジアを認める。併置はまさしく、この2つを結びつける奇妙さの中に象徴と状況の両方が割って入り、実在のより新しい、より豊かな知覚を明らかにするということを見るために、状況にふさわしい象徴をつみ取ることを拒否する。これは過去にあったものと、まだないものに向かって動く運動に燃料を与えているものとの間の摩擦をみる。<sup>注28</sup>

## II. 神の道化師達

### 1. 道化ヨセフ

ユーモアの内的な本質は、それがどんなに異端に見えようとも、宗教的気質の中にある。なぜなら、ユーモアがなすことは、すべての地上的、人間的なことが神の計りにはいかに足らないものであるかを、指示することであるから。注<sup>1</sup>

イザヤ・ベンダサンは、処女降誕の伝説を持たない日本人は、キリスト教の日本教への土着化にしたがい、最初に聖書から削除するものは処女降誕であろう、そして、次に削除するものは神であろうと述べております。注<sup>2</sup>

古来から素生と家柄を何よりも重んじてきた日本の社会制度の中では、アブラハムの系図にあるとは言え、倫理的頹廃をほのめかす系図の、しかも、未婚の乙女から生れたイエスの出生の秘密は、最も難解で許容しがたい伝説でありましょう。しかし、西欧社会は、処女降誕の神話を強調し、キリスト教の伝播を計ってきました。教会が、世俗と霊的世界との2つをがっちり支配していた中世において、意外なことに、この難解で許容しがたい歴史が人々の心をつかんだのは、社会制度のためでも、教会のためでもなく、人々が、彼等の宗教と信仰をどんちゃん騒ぎと風刺でもって祝いよろこぶことを知っていたためなのです。中世の喜劇は信仰に根ざしています。信仰に根ざし、ゆるがない思想の土台を持っていなければ、我々は喜劇を笑うことが出来ないでしょう。処女降誕の伝説なき風土。それは、たしかに、キリスト教にとっては、魂を枯渇させ絶望を与える土壌でありましょう。6世紀もの前の中世宗教劇をひもといた時、そこに見出すのは、したり顔の説教でも教訓でもなく、信仰をリアルなものとしてとらえようとした生活のエネルギーです。合理的精神の範疇をこえた形而上の世界を形而下の世界で祝うことによって真実なるものへ触れようとしております。

神の子をみごもったことを知らされたマリアの苦悩は想像にあまりあります。ルカ福音書のマリアは、御使ガブリエルに「どうして、そんなことがありますでしょうか。わたしには、まだ夫がありませんのに。」と抗議しております。マリアでさえ処女懐妊というきびしい運命をすぐには受け入れることが出来なかったのです。現代人は、このような愚なたわごとを信じることは出来なくなっております。マリアの夫ヨセフは、この思いがけない奇異な運命をどのように受けとめたのでしょうか。中世のヨセフも、我々と同様に、はじめから信ずることは出来なかったのです。

「夫ヨセフは正しい人であったので、彼女のことが公けになることを好まず、ひそかに離縁しようと決心した。」(マタイ、1:19)

ヨセフは古来から高潔で心の正しい人と考えられてきました。「ひそかに離縁しようと決心した。」この短い言及の中には、複雑な人間の心理と心の葛藤が感じられます。中世人のイマジネーションも、このマタイの言及にかきたてられたのでありましょうか。連続劇のヨセフは、敬虔で信仰心の厚い人物どころか、下品で粗野な弱点だらけの男として登場してきます。ヨセフの役割は、若く美しい妻を寝とられた年とったあわれな亭主。旅から帰ったヨセフは、マリアのお腹の大きいのに気づきます。

Joseph; That semyth evyl I am afrayd  
 þi wombe to hyze doth stonde  
 I drede me sore I am be-trayd  
 Sum other man þe had in honde  
 Hens sythe þat I went  
 Thy Wombe is gret it gynnyth to ryse  
 than hast þou be-gownne a synull gyse  
 telle me now in what wyse  
 thy self þou Ast þus schent.

*Ludus Corventriae, Joseph's Return, ll. 25-33)*

ヨセフ; あなたのお腹が大きいようだが私は裏切られたのかな。誰か他の男が、私が出かけてから、あなたに近よったのではないか、ずいぶん大きいようだ。さあ、言いなさい。どうしてこんなことになったのだ。



年とった亭主と若い女房，誠実な夫と不実な妻の物語。ギリシアの昔からある下世話な題材であります。ただ，マリアとヨセフの場合は，非凡な問題が課せられていました。マリアをだましたのは聖霊で，お腹の子は「神の子」というのです。とんだお笑い草になったものです。ヨセフは怒り狂い，マリアを罵倒し，あばれまわります。世間は，年がいもなく若い娘を妻にした自分を嘲り笑うだろう。誰とも顔を合わせることが出来なくなりました。「神とおれの子だと！ 何とくだらないことを！」

聖書の聖書的な言及の中から，道化ヨセフを創り出した中世人の喜劇的感覚は，人間をどのようにみているかということについて，人々の生活のある普遍的な1つの視点を明らかにしています。「心正しいヨセフ」という定まったパターンよりも，もっとありのままの人間の姿に興味を持っています。冷酷な運命を雄々しく引き受ける英雄よりは，そのまえに恐れおののき，ふるえ，うずくまる弱い人間の方が，いつの世も，くらべられない程多いのです。イエスの降誕を神聖化するよりも，人間ヨセフ，人間マリアの苦悩を，共に生きようとしていたと言えるでしょう。ヨセフを笑いヨセフと共に大声でわめき，そして，そのようなヨセフを丸ごと認める。そして，聖書の人物を日常的レベルでとらえ現実的に考えようとしただけではありません。

ヨセフはマリアと別れる決意をし，1人舞台にとり残されます。現代劇であつたら，残酷で滑稽な男が，救い主イエスの父としてふさわしい人間になるまでの心理的葛藤を克明に描いてみせるでしょう。現代の心理学は，全ての人間の行動に正当で納得のいく動機を見出そうと懸命になっていますから。しかし，中世劇は，それをもっと大胆に成しとげます。劇的ということは，人の改俊がいかにかすみやかになされるかということ，つまり，神の力が，突然人間を変えてしまうことを意味しており，それを見せることが劇の目的の1つでありました。ヨセフは，天使の声をききます。ほほを一すじの涙が伝わり，マリアの前にひざまずき，許しを乞います。

聖霊で満たされたヨセフ。ほほえむマリア。

道化ヨセフは、与えられた運命を拒否し、マリアを愚弄しても、反抗する人間の行動と法則をひっくりかえす世界のあることを気づかせ、そして人々は、全ての者が土から造られたものにすぎないことを知るのです。

「ヨセフの帰国」の劇は、しかし、ここで終わってはいません。人間の真実の姿は救いようのない程弱く、罪深く、そして、おろかなかぎりであることを、中世の作家は執ように追求してゆきます。

臨月のお腹をかかえたマリアにとって、ベツレヘムの旅はつらく苦しいものだったにちがいありません。マリアは疲れ果て、はげしい渴きをおぼえます。ふと足をとめると、真赤に熟れたさくらんぼを枝いっぱい実らせた木があります。

Maria; Now my spowse I pray 3ow to be-hold  
How þe cheryes growyn vpon 3on tre  
Ffor to haue þer-of ryght ffayn I wold  
and it plesyd 3ow to labore so me for me.

(*The Birth of Christ*, ll. 31-34)

マリア； いとしい方，おねがいがあります。むこうにみえる木に，おいしそうなさくらんぼがなっています。とても，のどがかわいています。少しばかりとって下さいませんか。

夫は喜んでとってくれるとおもっていました。しかし，

Joseph; 3our desyre to ffulfyllle I xal Assay sekyrly  
Ow•to pluck 3ow of these cherries•it is a werk wyld  
Ffor þe the is to hy3•it wol not be lyghtly  
þerfore lete hym pluk 3ow cheryes•be-gatt 3ow with child.

(ll. 35-38)

ヨセフ； あなたの欲望を満たすのに，私が危険を冒さなければならないのか。木は高く，年とった自分には大変な仕事だ。さくらんぼをとらせ，その上，子供までもうけさせる気なのだな。

冷酷な夫の言葉にマリアは，黙って，木に近より，手を伸します。すると，不思議なことに，高く大きな木が，さあ好きなだけ食べなさいと言わ

んばかりに、枝をのぼし、マリアに近づくではありませんか。ありのままの人間の姿と、この大らかな神の愛の力。そして、人々は、またもや、神の愛の力なしでは生きてゆけない被造物としての人間の真実の姿を知ります。神は、悪しき者、ヨセフの敗北を予見し給う。筋書の定められた劇の中で、むなしく反抗するヨセフ。この愚かな道化を笑うことは出来ても誰もとがめられないでしょう。

マリアの口を甘ずっぱいさくらんぼがうるおし、旅と出産への新たな気力を与えられて、2人は再び出発してゆきます。輝くばかりのマリアを見て、ヨセフの心は、恥と深い罪意識で笞打たれます。はげしい悔悟。粗野で愚かで罪深くもありながら、内なる生命を霊の光にてらされて変ぼうするヨセフ像は、人間は神の前では小さく、いつかちに返る存在であっても、新しい世界への可能性を与えられているのだということを暗示する希望の像であったのではないのでしょうか。

## 2. 『時』の使者、罪の女

まだ眠っているのか休んでいるのか。時がきた。見よ、人の子は罪人らの手に渡されるのだ。

(マルコ、14：41)

逮捕され悲惨な死をむかえるほんの数日前のイエスは、聖都エルサレムへ勝利の凱旋をした將軍のようでした。死者を復活させた奇跡は、光のようにすみやかにエルサレムのすみずみまで広がっていたし、過越の祭りのためエルサレムへ群がった群衆は、司祭長等に追放されたイエスのことを皆噂した。群衆は棕櫚の枝をもってイエスを出迎え、「ホサナ、主の御名によってきたる者に祝福あれ、イスラエルの王に。」と叫び、そして、パリサイ人たちは「何をしてもむだだった。世をあげて彼のあとを追っていたではないか。」と言った。(ヨハネ 12：12—19) 全てはイエスの支配下にあった。子ろばの上にのったイエスは枝の日曜日に、歓呼と拍手にむ

かえられて勝利の入城をし、ユダヤの民衆も、弟子までもパリサイ人さえも、イエスの勝利を信じていた。ただ1人、イエスを除いて。いや、イエスの迫り来る無惨な死を予知している人が、もう1人おりました。その勝利の陰に暗い運命を読みとっていたのは、予言者でも政治家でもなく、イエスを生涯かけて愛したひとりの女性だったのです。その名は、マリア。マルコ福音書では、<sup>1</sup>「ひとりの女」と呼ばれ、七つの悪霊にとりつかれた女性、ヨハネ福音書では、よみがえったラザロの妹のマグダラのマリアと記述されている人です。

愛する人を失った経験のある人は、受難の週に入る前日、ベタニヤでの悲哀に満ちた、だが、厳粛な葬りの儀式的場面に深く心を動かされるであります。ヨハネ福音書は次のように記しています。「過越の祭の6日前に、イエスはベタニヤに行かれた。そこは、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロのいたところであった。イエスのために、そこで夕食が用意され、マルタが給仕していた。イエスと一緒に食卓についていたもののうち、ラザロも加わっていた。その時、マリアは、高価で純粋なナルドの香油一斤を持ってきて、イエスの足にぬり、自分の髪の毛でそれをふいた。すると香油の香りが家にいっぱいになった。弟子の一人で、イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテのユダが言った。『なぜこの香油を三百デナリに売って、貧しい人たちに、施さなかったのか。』彼がこう言ったのは、貧しい人たちに対する思いやりがあったからではなく、自分が盗人であり、財布を預っていて、その中身をごまかしていたからであった。イエスは言われた、『この女のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それをとっておいたのだから。貧しい人たちはいつもあなたがたと共にいるが、わたしはいつも共にいるわけではない。』ここに出てくるマグダラのマリアとルカ福音書の（7章36—50）罪の女とを同一視する歴史的根拠はないのですが、コベントリーの劇作家は、伝導をはじめたばかりのイエスと名もないひとりの罪の女とのルカ伝の感動的な場面

を、一触即発の緊張のただよう憎しみと謀反の最後の晩餐の時に再現してみせます。ルカ福音書では名前を明らかにされていない「その町で罪の女」であったものは、中世人にとって、イエス・キリストの悲惨と栄光の旅路の準備をしたマグダラのマリアでありました。マタイは、そのマリアについてのイエスの御言葉を次のように伝えています。「この女がわたしのからだに香油を注いだのは、わたしの葬いの準備である。おまえたちによく言うておくが、福音ののべ伝えられるところでは、全世界いずこにおいても、この女の行ったことも記念として語り伝えられるであろう。」(マタイ・26:12—13) 現代の聖書学者は、この最高の名誉ある約束と罪の女とを結びつけることにこぞって反対するであります。<sup>注3</sup> しかし、愛の哲示であるキリスト教の教えでは、蘇ったキリストが最初の姿を罪の女にあらわされたと考えても、少しも不思議ではないのです。さげすまれた力なく弱い一人の女性が、その愛によって、永遠に賛えられると想像することは、深く人を感動で包むものであります。この受難劇のマリアは神の国に入るには、愛だけで、それだけで十分であることを教えています。

マリアは胸にしっかりと香料の入ったつぼを抱きかかえ、ひっそりと入ってきます。マリアのほほをとめどもなく流れる涙。このマリアの涙をめぐって、古来から限りなく議論が交わされてきました。昇天するキリストはこのような深い改俊の涙に渴いておられたのでしょうか。<sup>注4</sup> マリアの罪意識は自虐的でさえありますが、その罪の告白には希望への一筋の光がみられます。

As cursyd creature closyd all in care  
and as a wyckyd wrecche all wrappyd in wo  
Of blysse was nevyr no berde so bare  
as I my-sylf þat here now go  
Alas Alas I xal for fare  
ffor þo grete synnys þat I haue do  
lesse than my lord god sum-del spare  
and his grett mercy receyve me to

Mary mavdelyn is my name  
 Now wyl I go to cryst jhesu  
 ffor he is lord of all vertu  
 and for sum grace I thynke to sew  
 ffor of my-self I haue grett shame.  
 A mercy lord and salve my synne  
 Maydenys ffoure pou wasch me fre  
 per was nevyr woman of mannys kynne  
 so ful of synne in no countre

(*Ludus Coventriae, Ikedaf Sappr*, ll. -462-478)

悲しみにうちひしがれ  
 苦悩にさいなまれる悪にまみれた女。  
 今ここに行く私ほど神の祝福を奪われたものはありません。  
 ああ！ 私は死んでしまいます。  
 私が犯した大きな罪を  
 主が許したまい  
 大きなめぐみを、与えて下さらなければ。  
 私の名はメアリー・マグダレーン、  
 私はキリストのもとへいきましよう。  
 イエスこそ全ての徳の主であられ、  
 主のめぐみを乞いに私は急いでゆきます。  
 私は心から自分を悔いています。  
 めぐみ深き主よ、私の罪をお救い下さい。  
 聖母マリアのかぐわしき子であられる主よ、私を洗い清めて下さい。  
 あまたの人の中でも、私程罪にけがれたものはありません。

「洗い清める」という言葉はマリアが決して絶望していないことを暗示しています。イエスの足もとに跪き、涙でぬらしたイエスの足を髪の毛でぬぐい、その足に接吻して香油を注ぐ女にイエスは静かに語りかけられます。「マリアよ、あなたの涙があなたを救ったのです。」高価な香油を売って貧しい人たちに施せば良いのにと不平を言うユダをイエスはきびしく退けられます。十字架の上から「私は渴く」と、消えゆく生命をみつめながら言われたイエス最後の食事をとられた晩餐の席に、落つる涙をぬぐおうともせず激しく主を求める女性が訪れ、罪を許され、葬りの用意をしたの

です。何とすばらしい愛の交流でありましょうか。この罪の女と、イエスをにがにがしく思っている人物がこの場におりました。師を売り渡そうとし、この世で得られる名誉をおもいめぐらしながら。

Jndas: Lord me thynkyth þou dost ryght ylle  
 To lete þis oynement so spylle  
 To selle it yt were more skylle  
 and bye mete to poer men  
 The box was worth of good mone  
 iij C. pens fayr and fre  
 þis myght a bowht mete plente  
 to Ffede oure power ken. (ll. 514-521)

主よ、あなたは良いことをなさいました。  
 香油をそのようにこぼしてしまつて。  
 それを売り  
 貧しい人のために肉を買った方が良かったのに。  
 その香油の箱はかなりの額になります。  
 三百デナリ位にはなるでしょう。  
 沢山の肉を買い、貧しい人々を養うことが出来たのに。

ユダと、主との別れを感じとり悲しみにふるえる女とを対照させるとき、イエスの波乱にみちた生涯の真の意味が鮮烈に印象づけられてきます。愛と憎しみ。友情と裏切り。沈黙と言葉の上だけのヒューマニズム。希望と絶望との世界を浮びあがらせてゆくのに、光と闇のように際だった対照を用いるのは中世人の生活に深く根ざしたものであります。

五百年程前の世界では、人生のすべての出来事は今より遙かに鋭い輪郭を持っていた。悲哀と喜悦、不幸と幸福の間の懸隔もわれわれの場合よりずっと大きかったらしい。彼等が体験したすべてのことは、子供の感ずる喜びや悲しみに今でも僅かに残っている様な直截性と排他性を持っていた。……あらゆるものが永遠の対照、多彩な形式という印象を与えたが、そこから、ある魅力が日常生活の中に醸し出される。<sup>注5</sup>

主の晩餐の席をそっと抜け出し、銀30枚を懷に、なにくわぬ顔で戻り、また加わるユダとは反対に、この罪の女マリアは、晩餐の間中そこにとど

まり、主に仕え、そして、ゲツセマネへ赴くイエスに従います。ユダが師を売り渡し、お金を数えていた時、マリアは、人の子の中で最も美しいイエスの肉体もやがては冷たい地の中によこたわるのだということを心にきざみつけておりました。ねむりこけていた弟子達にかわって、死の恐怖にふるえ、血のような汗をしたたらせながら祈るイエスを支えたのも、このマリアです。「罪の女」が許され、無垢なイエスはあざけりの死を受け入れなければならない。マリアの胸からも熱い哀しみの涙がオリブの山をぬらしました。彼女は主を愛し、求め、愛によってその「時」がくるのを誰よりもいち早く察し、香油を注ぎそれを告知しました。何というねばり強さ。何という熱情的でひたむきな愛でありましょうか。

イエスの逮捕の知らせを聖母マリアに告げるのはこのマグダラのマリアです。「あの子は私の罪のために……」と泣きくずれる母の肩をそっと抱きかかえ、罪の女は得たものの尊さと失ったものの大きさに震撼したのです。

よみがえったイエスは最初の姿をマグダラのマリアにあらわされたのですが、中世人のマリアを通して、我々は、どうして力なく弱い一人の女性がキリスト復活の奇跡の証人となる程の最高の栄誉を与えられたのかを理解出来るでありましょう。

聖書の枠組から離れた罪の女＝マグダラのマリアという受難劇は中世人の愛についての考え方を明らかにしています。「時」の使者、罪の女は、中世の人々にとって愛と希望への使者でありました

### 3. ズボンを持った男と姦淫の女

たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。  
紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ。

(イザヤ書・1:18)

中世人の生み出したコベントリーの「姦淫の罪でとらえられた女」に登場するズボンを持って駆け出してくる男は、これまで、単に、コミックレリ



一フ注<sup>6</sup> だとか、墮落した下品な冗談にすぎないと片づけられてきました。果たして、そうでしょうか。この卑猥な中世人の悪戯の中にさえ、信仰を祝うという空想力の豊さがみられるのです。キリスト教の既成の価値の転換という根本のパラドックスは、ふざけた非礼さの中にも脈う っ て い ま す。

パリサイ人達や律法学者達がイエスを試し、訴える口実を得ようと相談しているところへ、告発人がかけこんできます。

Herke sere pharysew and sere scrybe  
 A ryght good sporte I kan zow telle  
 I vndyr-take þat ryght a good brybe  
 We all xul haue to kepe counsell  
 A fayre zonge qwene here-by doth doth dwelle  
 both ffresch and gay upon to loke  
 And a tall man with here doth melle  
 the wey into hyre chawere ryght evyn he toke.

(*Ludus coventriae, The Woman taken in Adultery*, ll. 65-72)

きいて下さい、パリサイ人達と律法学者の皆さん。  
 この上なく愉快的な見せ物を知らせることが出来ます。  
 これなら絶対に良いわなになることまちがいなしです。  
 皆でよく考えましょう。  
 若いきれいな女が近くに住んでいるのですが。  
 見たところ初々しくおもしろい女なのですが、  
 背の高い男が女といちゃつくため  
 女の部屋へ入っていったばかりです。

彼らは急いで問題の女の家へ行き、戸をたたきます。若い男が狂乱の態で、手に半ズボンを持ち、裸のまま、靴のひもも結ばず走り出てきます。大声でわめき散らし、手には短刀を持ち、相手かまわずきりつけ、あげくの果て自分の靴のひもにつまずき、腹ばいになって、罵倒と喧噪の中を退場してゆきます。人々は、手をたたき、足をふみならし、口笛をふき大笑いしたのでありましょう。そして、ズボンを持った男の情欲を笑った観客は、次には、律法学者とパリサイ人達の偽善をもこきおろします。姦淫の

現場をとりおさえたとはばかり、悪口を言い、なじるパリサイ人達も情欲のとりこになっているのです。女の家戸口に立って、淫な歌と狂乱したリズムで女を呼び出す彼らの好色的サディズムはグロテスクなかぎりです。そこへ、戸口から、女は狂おしい程までに神の慈悲を乞い求めながら出てきます。

A mercy mercy serys I 3ow pray  
Ffor goddys loue haue mercy on me  
of my mys-levynge me not be-wray  
haue mercy on me for charyte.

(*The Woman taken in Adultery*, ll. 153-156)

お慈悲を、お慈悲を  
私の愛にかけて、私にお慈悲を。  
私の悪い生活のため私を告発しないで下さい。  
私をあわれとおもって。

男に見捨てられた娼婦の方が、形骸化した律法を奉じ、あやまった道德観にしばられ、抑圧された性の衝動のあやつり人形と化したパリサイ人達の不潔さと愚劣さを告発しているようです。

群衆は女をイエスのところへひっぱってゆきます。静かに地面に何かを書いているイエスと群衆と、半狂乱のようになった女。驚くばかりのコントラスト。女はイエスの持つあたたかさに息をのみ、突然ひざまずき、全身を投げ出して懺悔します。

Now holy prophete be mercyable  
vpon me wrecch take no vengeaunce  
Ffor my synnys Abhomynable  
In hert I haue grett repentaunce  
I am wel wurthy to haue myschaunce  
Both bodyly deth and werdly shame  
but gracyous prophete of socurraunce  
pis tyme pray 3ow for goddys name. (ll. 209-216)

慈悲深き、聖なる予言者  
私にどうか残酷な復讐はしないで下さい。

私の罪は、おそろしく許しがたいのですが、  
 私は心から後悔しております。  
 私は死刑をうけ、はずかしめを受けるに当然ですが、  
 救い主であられる慈悲深き予言者  
 神の御名に祈って下さい。

パリサイ人達は、口々に、<sup>ゝ</sup>石打ちの刑を！と叫び、女は、彼らが全く  
 目に入らないかのように何度も主に懇願します。

Jhesus; Loke which of 3ow þat nevyr synne wrought  
 but is of lyff clenmere pan she  
 Cast at here stonys and spare here nowght  
 Clene out of synne if þat 3e be. (ll. 229-232)

お前達のうちでこれまで一度も罪を犯したことがなく、  
 彼女より清い生活をしている者が  
 彼女に石を投げるがいい。  
 お前達が全くけがれがないのなら、彼女を容赦してはならない。

パリサイ人も告発人も逃げ去り、彼女は全く安全になったにもかかわら  
 ず、立ち去ろうとはしません。群衆と喧噪が去った静寂さの中で、主イエ  
 スとの交流を通して、姦淫の女の悔悟の深さが強められてゆきます。

ズボンを持った男は、姦淫の女の罪を全く弁解の余地のないものとして  
 明らかにすると同時に、時の知識階級と権力者の愚劣さとその価値観と道  
 徳の低級さをあばき出しています。ズボンを持った性欲過剰の快楽をむさ  
 ぼる男と同じレベルに彼らをひきずり降すことによって、痛烈な社会批判  
 を行ない、そして、何よりも、滑稽でグロテスクな者を笑うことにより、  
 希望の淵に触れようとしています。姦淫の女の汚れた緋色は白く清めら  
 れ、紅のように赤い傷口は、やわらかな主の御手によっていやされたので  
 す。

## 4. デドモと呼ばれているトマス

あなたはわたしを見たので信じたのか。

見ないで信ずる者はさいわいである。

(ヨハネ・20：29)

イエスを取りまいていた人々が、イエスの復活の奇跡をどのように受けとめたのでしょうか。聖書においては、動しがたい証拠を得るまでは決して信じようとはしない使徒達の不信と懷疑は、簡単に信じてしまうイエスの敵との対照によって積極的な肯定の意味あいをもって記されています。神はおろか、自分自身さえも疑い、全てのものに不信の眼をむけずにはおれない現代人の懷疑主義は、イエスの手と足の創痕を見せられても、決して、信じようとはしないでありましょう。トマスも、使徒も、イエスと共に信ずることの豊かさを経験していましたから、その懷疑主義を脱して、みごとな信仰告白をしております。

中世のコーンウォール地方の宗教連続劇「我が主の復活」の作者は聖書の記述にとらわれず聖トマスの不信を、低次元の人間のレベルまで引き下げ、疑うことと信ずることのテーマを追究しています。聖書とはちがって、主の復活を信ずる使徒達の中に、懷疑主義にとらわれているトマスを投げ出してみるのです。

朝早く、アリマタヤのヨセフの墓地に出かけた三人の女性、マグダラのマリヤとヤコブの母マリア、そしてサロメの三人は、主が復活されるという言葉で心から信じておりました。墓へ着いてみると石はすでにこわされ、主の体が消えている。三人は、主の復活に間に合わなかったと嘆きます。

Magdalene; Jesus Christ, Lord of heaven,

O hear now our voice;

Who believes not in thee, miserable he!

He will not be saved. (*Cornisa Resuervexio Domini Nastri*, ll. 755-58)

天国にましますイエス・キリスト  
 我等の声をききたまえ。  
 あなたを信じない者はみじめで  
 決して救われることはないでしょう。

マグダラのマリアは主の復活を弟子達に伝えるためガリラヤに赴きます。  
 実証を重んじるトマスはマリアの証言を信じようとはしない。彼ははじめ、マリアにそっけなく返答しているだけなのですが、主が特別にペテロに慰めの言葉をおくられたことをきくと、嫉妬心にかられ、子供のよう  
 に、感情を爆発させてしまいます。

Silence, and speak not, thou woman!  
 I pray thee, mockery with us  
 Now do not make;  
 Stout though Castle Maudlen be,  
 If thou dost I will break thy head. (ll. 917-21)

おだまりなさい、何も言わないで下さい、女よ  
 おねがいですから、我々を侮辱しないで下さい。  
 マグダラの砦が強くとも、  
 これ以上あなたが続けると頭をぶち割ってやります。

マリアはトマスの威嚇に少しも動揺せず、毅然と立ちむかい、あくまで主がよみがえられたことを主張し続けます。トマスを徐く全ての弟子達が次々に信仰告白をしてゆくにもかかわらず、トマスは頑に彼らを拒絶し、マリアの暗い過去を持ち出しののしる始末です。マリアは、その様なトマスに不安をおぼえ、信じることによって救われた自分の例をみつめて欲しいとすがりつき、懇願します。

I advise thee to believe,  
 And if thou dost not, seriously,  
 Thou shalt have surely sharp repentance. (ll. 1130-32)

どうぞ信じて下さい  
 そうなさらなければ、後に  
 はげしい後悔におそわれるでしょう

クレオパの目に写ったトマスは、全く、気が狂ったとしかいいようのない

みじめな姿です。

Thomas, thou art an unbeliever  
Most truly, and very mischievous;  
Thou mayest be ashamed  
Not to believe him risen again.  
There is to thee a hard heart,  
Nor hast thou lessened thy will;  
Leave off the great defiance,  
Else thou canst not be saved. (ll. 1519-26)

トマス、お前は何という不信の徒だ。  
全く心のねじけた奴だ。  
主がよみがえられたことを信じないとは。  
かたくなな心だ。  
そのねじまがった我をなおそうともせず。  
反抗心を捨てろ。  
さもないとお前は救われない。

マグダラのマリアの女らしいやさしさとトマスとを対照させ、次には、三度主を拒み、三度自らの墓穴を堀り、それでもなお、主の教会の永遠の権威、最上権を与えられたペテロと対照させてゆきます。トマスの悔い改めに先だって、神の愛に触れ、深く罪を悔い、余生を伝導にささげる決意をするペテロを登場させます。熱しやすくさめやすいペテロと、罪に汚れた女をこよなく愛されたように、強迫的神経症に悩むトマスに、主は、自ら、救いの手をさしのべられ、血のふき出た胸と、御手の傷口にふれさせます。「わが主よ、わが神よ」と告白するトマスの深い感動に、感情の起伏の激しかった中世人は、共に涙にむせんだにちがいありません。

自己の救いがたい弱さに激しく泣いたペテロと、けがれた生活を嫌悪して涙をこぼしたマリアとが、懷疑主義にこりかたまっていたかたくななトマスと対比されています。同じ罪人の席に立たされながら、ペテロとマリアはトマスの悔悟を予告し、不信のとりこになっているトマスへも深い信仰への道が開かれることを示すのです。

イエスは、見ないで信じるものはさいわいであると言いました。しかし、一方では、イエスは、自分の実体は我々人間と少しもかわらないこと、現実の地上の肉体を持っていることを証明しようとしていました。肉体が実体をもっていること、よみがえった自分は、生きた肉と骨を備えていること、歩くことも出来るし、食べることも出来るのだということを弟子達に認めさせようとおもっていました。(ルカ・24:36—43)罪人トマスの不信は、主が十字架の悲惨な死にもかかわらず死の前と少しもかわらず復活されたこと、主の肉体と魂が永遠の生命に入ったことを証しするものです。中世のこのトマスについての劇は、信仰あつい弟子達の中に、トマスをおいて、その不信と懷疑を際立たせ、錯綜する人物の中で、トマスの救いへの道をたどってゆこうとするものです。トマスは、主の傷口にさわり、そして、やっと、主の御言葉を信じる事が出来ました。実証出来ないことを信じようとはしない現代人の懷疑と不信は、もっと深く、救いがたく、無の淵に近いのですが、このトマスの見なければ信じられなかった苦しい心の遍歴がなかったならば、見ないで信ずるという希望への道はもっとかすかなものになっていたであらう。

## 注

### I. 中世宗教連続劇の理念

1. 柳生望, “神学テーマの現代文学による形象化”, 「神学の声」, 19巻1号, 聖公会神学院, p. 8
2. ヨハン・ホイジンガ, 兼岩正夫・里見元一訳, 「中世の秋」, 創文社, 1967, p. 221
3. マーティン・エスリン, 小田島雄志他訳, 「不条理の演劇」, 晶文社, 1968, p. 343
4. J. E. ハリソン, 佐々木理訳, 「古代芸術と祭式」, 筑摩叢書 31, 1967, p. 116
5. アウグスティヌス, 今泉三良・村治能成訳, 「告白」, 河出書房, 1969, p. 68
6. トマス・アクイナス, 「神学大全」, 第1部第39問8章
7. マーティン・エスリン, *op. cit.*
8. ハービー・コックス, 志茂望信訳, 「愚者の饗宴」, 新教出版社, 1971, p. 15
9. ブリュックベルジュ, 別宮貞徳訳, 「キリスト伝」, 筑摩叢書150, p. 27-28
10. V. A. コルブ, *The Play Called Corpus Christi*, Edward Arnold, London, 1966, p. 156

11. コックス, 「愚者の饗宴」, p. 11
12. V. A. コルブ, *op. cit.*, p. 137  
    ・ ・ ・ the drama texts themselves offer our best proof that neither in detail nor in spirit do the cycles display tendency to mock, blaspheme, or make merry with the sacred characters of the story ・ ・ ・
13. アリストテレス, 笹山隆訳, 「詩学」, 研究社, 1969, p. 17
14. コックス, *op. cit.*, p. 216
15. クリストファ・ドウソン, 野口啓祐訳, 「中世のキリスト教と文化」, 新泉社, 1971, p. 94
16. W. パネンベルク, 近藤勝彦訳, 「神学と神の国」, 日本基督教出版局, 1972, p. 103-4
17. アウグスチヌス, 「告白」, *op. cit.*, p. 305
18. *Ibid.*, p. 304
19. *Ibid.*, p. 532
20. *Middle English Sermons*, by Woodbarn O. Ross, E. E. T. S, London, 1960, p. 112-113
21. *Mirror of the World*, by William Caxton, ed Oliver H. Prior, 1913, E. E. T. S, p. 10
22. パネンベルグ, *op. cit.*, p. 226
23. *Ibid.*, p. 122
24. Allardyce Nicoll, *British Drama* "The beginning to Shakespeare," George G. Harrap, London, 1962, p. 36
25. 山内登美雄, 「現代演劇の理念」, 未来社, p. 156
26. 拙論, "The Corpus Christi Plays と呼ばれる劇—厳肅さとよろこびの中で—, 調布学園女子短期大学紀要, 第4号, 1971
27. Cf. 「現代演劇の理念」, p. 155
28. コックス, *op. cit.*, p. 204

## II 愚かなるものの群れ

1. P. Lersch, Die Philosophie des Humors. Hugo Rahner, *Man at Play*, New York, Herber and Herber, 1967, p. 35
2. イザヤ・ベンダサン, 「日本人とユダヤ人」, 山本書店, 1971, p. 141
3. アブラハム・カイパー, 中村妙子訳, 「聖書の女性新約篇」, 新教出版社, 1972, p. 43, 「彼女には, イエスの御足を洗ったあの悔い改めた罪の女とはいささかの共通点もない。」
4. *Jacobus Well*, p. 185



5. ヨハン・ホイジンガー, 兼岩正夫, 里見元一郎訳, 「中世の秋」, 創文社, 昭和41年, p. 3-4
6. E. プロッサー, *Drama and Religion in the English Mystery Plays*, “The Woman Taken in Adultery,” Stanford University, California, 1961